

果実日本

6

2015
No.70



毛毛
peach

特集

果樹における低樹高化の展開方向

海外果樹事情通信



第6便

オーストラリア・ビクトリア州 のモモ生産概況

こうはん農園 園主 生原 秀一

オーストラリアへの農業視察

私がオーストラリアの農園へ視察に行くことになったのは、趣味である空を飛ぶグライダーがきっかけでした。オーストラリアのフライングスクールから連絡があり、飛びに来ないかと誘われました。その時、今私は桃農家にチャレンジしていると話しました。するとスクールのあるタクマオール町の近くにはモモ園地がたくさんあり、そのフライングスクールから「モモ農園の視察とグライダー」の両方できます、是非いらしゃいませんか」と誘われました。私は山梨県のアグリマスター制度が終了し、補助金をいただいていたので、その半額分利用してオーストラリア研修に、残りの半分はモモ農家をもっとも重労働となる袋かけを、簡単に楽に早くできる道具「果樹袋かけグローブ」の開発に使いました。

▼視察農園の概況

オーストラリアでの第一回目の視察は二〇一三年一月一五日から、マティータ社のミック・ダマニアル氏の農園でした。

園地は、オーストラリア・ビクトリア州・メルボルンから北へ車で二六〇km、海拔は一二〇m、気温は一月の中、下旬で三七〜四二℃、最低気温が一五℃位と温度差があります。当地は南半球ですから日本とは季節が逆になります。冬季は乾燥して、気温は氷点下になり、降雪もあります。土壌の状態は砂漠地帯のため、標準測定でphは六・五、苦土分三一・四mg、カリ分三二・六mgと高めです。水利は、近隣のマレー川から誘引し、すべての園地にスプリンクラーを設置。その他に井戸が二カ所あります。

モモの栽培はビクトリア州のみ栽培が可能であるとのこと、台木にはマザード種をメインに使用し、接木技術があります(写真①)。

この周辺の大規模経営農家は五〇



写真① モモ園地の様子

歳代の方が、自分の代一代でこの規模まで大きくしてきたそうです。そんなマテータ社は、約八〇〇haの園地を管理し、モモ、ナシ、リンゴの複合栽培により年間を通して出荷しています。販売額は円換算で年商一〇億円程になります。雇用は社員、アルバイトを

マテータ社のモモの出荷基準は径が六・三〜七・五cmまでで、八・〇cm以上は規格外となります。日本の感覚では大玉が有利と考えますが、オーストラリアでは子供にお弁当のデザートとして持たせる程度の大きさを求めているようです。

第一回目の視察を終えて

含め約五〇人、当園地の他に契約農家が六件有り、一二月下旬〜三月中旬位までがモモの出荷のピークとなります。マテータ社は基本的に小売店との取引のみで、契約したスーパーマーケットまで直接自社のトラックで運びます。毎日七〜八時をメルボルンに四時間、シドニーに二二時間、ブリスベンには三日かけて運んでいます。

色は特に基準がなく、

糖度は一度から小売店が引き取ります。今回の視察中の糖度測定では、測定したモモすべてが一三度位ありました。モモの種類もピンク桃、黄桃、ネクタリン、蟠桃（ばんとう）までありました（写真②）。

小売店での販売価格は量り売りで二五玉程度が約一五オーストラリアドル。オーストラリアは物価および人件費が非常に高くなってきており、小学校教員などの公務員が年齢二五歳程度で年収一〇〇万円を超えるそうです。この田舎町タクマオールでも年金生活者が年間の生活費に四〇〇〜五〇〇万円は必要なのです。

この時、いろいろな話をお聞きし見学してみて、あまりにも日本との違いが大きく驚き、戸惑ったということが実感でした。日本に



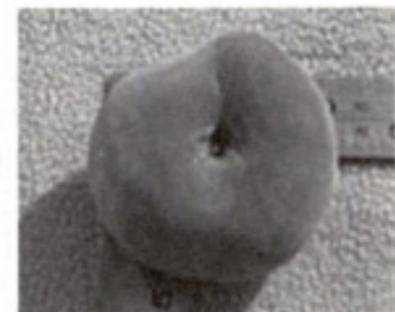
ピンク桃



黄桃



ネクタリン



蟠桃

写真② オーストラリアのモモの種類

帰ってから、約二年の間この違いのことをずっと考えていました。初めて見聞きしたことは本当なのか？確認したい事がたくさんあったのです。幸いにして、前記のクリスマス制度でいただいた補助金を使って開発した「果樹袋かけグローブ」の販売が好調で、資金ができたことで、再度オーストラリアへの視察に行くこととなり

ました。

二年越し第二回目の視察

第二回目のオーストラリア農業視察は第一回目の疑問を解くための視察でした。

前回視察をさせていただいたマティータ社のミックさんが言われていた事が、一般的なオーストラ

リアの農業事情なのか、私は二〇一五年一月九日から、特に疑問に思っていた三点を確かめてみよう

と決めて、オーストラリアに向けて出発しました。今回は、マティータ社からできるだけ離れた産地で話を聞きたかったこともあり、幸いにもマティータ社より北に約七〇km離れたコブラ町で農業経営を

行っているRJコーミット社のジームスさんの農園で話を聞き、作業体験する事ができました。私が疑問に思っていた三点については、農業用機械はどのようなものを使用しているのか、広い農地をどのように機械化しているのか、オーストラリアでも果実への袋かけ作業はあるのか（有袋があ

るのであれば果樹袋かけグローブ「こうはんくん」のPRをする）。

▼視察農園の概況

RJコーミット社は五七〇haの園地を管理し、モモ（ピンク色・黄色）一八〇ha、ナシ一〇〇ha、リンゴ二〇〇ha、レモン八〇ha、麦一〇haを栽培しています。

年間を通じて六〇人、繁忙期には約一〇〇人近くの従業員を雇い、四〜五人のチームに分かれて作業します。ほとんどが地元の人ですが、フランス人も数人含まれています。午前七時から午後五時の間雇用しています。

RJコーミット社も販売先のスーパーマーケットまで自社のトラックで直接荷物を運んでいます（写真③、写真④）。また、加工用のモモはシェパードン町のSPC社（一〇〇年近く歴史の有る工



写真③ 収穫したものを450kgコンテナで輸送



写真④ 自社トラックで販売先まで運送



写真⑤ アメリカ製の3輪リフト（やや不安定）

場)まで運びます。

コブラ町には果樹組合が有り、メンバーは四五名で、合わせて二〇〇〇ha園地を持つ組合です。その一員であるRJコーミット社は、経営者の祖父がシェパードン町から移住し、その後父親が農業を始めて、現経営者のジームスさんが二代目で、このコブラ町で四二年間農業経営をしています。

水利はやはりマレー川からの誘引です。水路は政府が作造成しました。そこから水を供給したことで耕作園地が広められました。コブラ町はマレー川の観光と果樹産業の町です。

農業用機械は、トラクター三〇台、リフト五〇台、実を落とす機械が三台あります。その他にトラック、草刈機、バックホー、コンバイン、自動剪定はさみ、ボーリング設備、ガソリンスタンド設備、そして見た事のない機械も多数ありました(写真⑤)。

その機械のメンテナンスを専門に行う社員が三名います。機械はアメリカ製と韓国製が多く、日本製はありませんでした。しかし、自動車となると多くのオーストラリア人は日本製の車に乗っているのです。

▼疑問の解明

今回、日本の農業用機械のカタログ・パンフレットを準備し、お会いした方々に説明しました。また、日本のモモの栽培方法をガイドブックで説明しました。結果、みなさん日本の農業機械やモモのつくり方に興味が出てきましたとの回答をいただきましたが、モモの袋かけについては、本当に驚きだったようです。「日本ではすべてのモモに袋をかけるのか?ここではネットをかける事はあるが、モモに袋をかける事など考えられない」との反応でした。さらに、反射マルチを敷くと話したらまた驚かれました。この時にオーストラリアではモモに袋をかけない事

を知ったのでした。

おわりに

今年の夏(一月)オーストラリアの当地では天気が悪く、毎週一日は雨が降り、曇りの日も多かったそうです。しかも温度も低く最高でも三〇℃でした。例年は四〇℃位まで温度が上り、常に乾燥している土地ですがここ何年かは良くないとの事でした。このこともマティータ社のミックさんから以前お聞きしていた事が、ほぼ合っているということが事が確認できました。

最後に、RJコーミット社のジームスさんに感謝致します。日本人の私がオーストラリアのモモの話を知りたいと何か所も連絡を取りましたが、断われ諦めかけていたのを快く受け入れていただきました。また、マネージャーのダックさん、園地や選果場で働くワーカーのみなさんにも親切に対応していただきました。そのワーカー

のみなさんが楽しそうに仕事をしていることがとても印象に残りました。

今後も両国のモモ作りの参考になる事を見つけていければよいと思います。これから農業を始める人を含めて、若い果樹農家の方々に一言。

「是非海外を一人で見に行ってください。自分で計画し行動して初めてわかる事が多いのです」

新しい情報を少しずつ見つけて帰って来れば農業のイメージも変わると思います。

オーストラリアでは農業「カッコイイ」と言います。日本ではみな大変な仕事です。私にはこのズレを、日本の農家が「農業」カッコイイ」と言われるような果樹農業にしていきたいと思っています。

(こうはん農園 山梨県笛吹市春日居町小松二〇一三)